



**Data** 2023-79

監督・脚本: ユン・ジョンソク  
原作: スペイン映画『インビジブル・ゲスト 悪魔の証明』(17年) オリオ・パウロ監督  
出演: ソ・ジソブ/キム・ユンジン / ナナ (AFTERSCHOOL) / チェ・グァンイル

## 👁️👁️ みどころ

“密室殺人事件” (の解明) は推理小説最高の醍醐味だ。他方、黒澤明監督が『羅生門』(50年) で見せた、“羅生門方式” が、是枝監督の最新作『怪物』(23年) で再評価されているから、その両者を組み合わせると・・・？

そんな発想(?) で、不倫密室殺人容疑の男と無罪率100%を誇る美人女性弁護士2人だけの事情聴取から始まる“舞台劇 (密室劇)” のような“推理あれこれ” はメチャ面白い。ストーリーのポイントは不倫当事者の別件交通事故への遭遇と、その事故処理を絡めた手法にあるが、羅生門方式による状況提示手法は抜群だ。アラン・ドロンの『太陽がいっぱい』(60年) では「死人に口なし」の思惑はうまくいかなかったが、さて本作では？

トランクに死体が詰まった車が湖の中から引き揚げられてくるエンディングを含め、二転、三転、四転、五転、そして六転、七転するストーリーを、多少の演出上の無理は我慢しながら、タップリと楽しみたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■密室殺人はミステリーの原点！その醍醐味は？■□■

推理小説の大家はコナン・ドイルやエドガー・アラン・ポー、そしてアガサ・クリステイ等々、世界中に多いが“密室殺人事件” はミステリーの原点！そして密室殺人事件の醍醐味は、なぜ不可能を可能にしたのか？ということにある。

本作冒頭に提示されるのは、IT企業社長ユ・ミンホ (ソ・ジソブ) の不倫相手であるキム・セヒ (ナナ) がホテルの“密室” 内で殺されたという事実。もっとも、本来の“密室殺人事件” は死体だけが密室内に残されていたというものだが、本作では警察が鍵を壊して部屋の中に押し入ると、頭を打たれて血を流したミンホが倒れていた、というものだから本来の密室殺人ではない。しかし、“100%無罪を勝ち取る” 敏腕女性弁護士ヤン・シ

ネ（キム・ユンジン）の手にかかれば、事件の第一容疑者になっているミンホの無罪も可能らしい。しかし、そのためには弁護士である自分にミンホがすべて正直に話すことが大前提。弁護士を50年近くやっている私には「100%無罪を勝ち取る弁護士」は疑わしいが、「依頼者がすべてを話すことが不可欠」という考えには同感。

一時釈放されたミンホは今、1人で別荘に入っていたが、車でそこを1人で訪れたヤンはミンホからどんな事情聴取を？

### ■□■弁護士が別件交通事故との関連を追及！なぜそこまで？■□■

依頼者が弁護士に対して最初に口にするのは自己弁護。すなわち、自分の正当性だ。本作についても「不倫をバラされたくなければ金を用意しろと強迫され、やむなく大金を準備してホテルの部屋に入ったところ」「・・・で」、「結果的にセヒの死体があり、お金が散らばっていた」という、ミンホに都合のいいものだった。しかし、それを聞いて納得するような弁護士はどこにもいない。ミンホの説明は、逆に「犯人はミンホに間違いなし」と思わせるものだった。

そんな状況下、本作最初のポイントは、ヤンの携帯に「事件の目撃者が発見されたため、再度ミンホの逮捕が執行されるかもしれない」という「検察側の情報」が入ったこと。そんなことがホントにあり得るのかどうかは怪しいが、そこは映画上の演出のこと。そんな情報にひるんだミンホ（？）に対して、ヤンは「息子を探しています」と書かれた1枚のポスターを示し、それに目をそらしたミンホに対して、「知らない人のポスターならじっくり見るはずだが、あなたは目をそらした。だから、この人について知っているはずだ」と追及し始めたからすごい。なぜヤン弁護士が事前にそんなポスターを入手し、持参していたのかも不自然だが、それも映画なればOK！そこで「こんな弁護士なら何を話してもOK」と考えたミンホ（？）が「実は・・・」と話し始めたのが、別荘での密会を終えた2人の帰り道で起こした“とある交通事故”についての供述だ。

ミンホが助手席に乗りセヒが運転していた車が、急に飛び出してきた鹿を避けようとして反対車線から来た車とあわや正面衝突しそうになり、相手車は木に激突して運転手は死亡！さあ、そこでミンホとセヒはどうしたの？ミンホの説明はヤンの主導による、なんとも冷酷なものだったが・・・。

### ■□■本作に見る“羅生門方式”に注目！別件の真犯人は誰！■□■

是枝監督の『怪物』（23年）が第76回カンヌ国際映画祭で注目を浴び、坂元裕二が脚本賞を受賞した。これによって、同作の“羅生門方式”が黒澤明監督の『羅生門』（50年）以来、久しぶりに注目された。羅生門方式とは、「目に見える事実は必ずしも1つではなく、見る人間や視点によっていろいろあるものだ」ということをスクリーン上に提示するもので、「同じ出来事を複数の登場人物の視点から描く手法」。しかし、本作導入部にみる“弁護士 vs 依頼者”間の別件交通事故を巡る、ハラハラドキドキ、手に汗握る“事情聴取”は、“羅生門方式”によるヤン弁護士の視点によると、その運転手はセヒではなくミンホ、死

体を処分したのもセヒではなくミンホだということだ。そして、「息子を探しています」のポスターに写る女性は死亡した息子の母親で、彼女はセヒが殺されたホテルの従業員だと説明し、ヤンの考え方を提示すると、ミンホはそれに微妙な反応を示したから、アレレ…。

別件交通事故についてのヤン弁護士に対するミンホの説明は真っ赤な嘘で、「死人に口なし」とばかりに、ミンホはその責任をすべてセヒに押し付けていたの？現場で困っていたセヒを車に乗った通りがかりの近所の男がたまたま車の整備工だったため、セヒの車を点検し修理してくれたというミンホが説明するストーリーも不自然この上ないが、映画としてはこりゃメチャ面白い。また、“羅生門方式”の応用としてもメチャ面白い。しかし、なぜヤン弁護士はさまざまな視点からこんな疑問を示し、ミンホに対して問題提起することができるの？ヤン弁護士の知性的な顔や鋭い論法を見ていると、こりゃかなり優秀な弁護士だと思っていたが、ストーリーが進むにつれて、アレレ、アレレ・・・、それすら、ビックリ仰天の展開に・・・。そんな、“羅生門方式”にビックリ！この、二転、三転、四転、五転、そして六転、七転する脚本はまさに絶品！

## ■□■受任の可否は？弁護士の“守秘義務”がポイント！■□■

本作は弁護士業界の実務のあり方を知らなければ分かりにくい点があるかもしれない。その点を弁護士歴49年の私から説明しておく、医師は患者から診療を依頼された場合に拒否できないが、弁護士は依頼を断るのは自由、その理由は問われない。そのため、本作冒頭、ヤン弁護士はまずミンホの依頼を受任するか否かはこれからのミンホの事情聴取の結果によると宣言している。さらに、ヤン弁護士は別件交通事故事件についてのミンホの説明を聞いて、羅生門方式の視点から(?)“真っ赤な嘘”だと決めつけたうえ、ミンホが正直に事情説明をしたと判断できた時点で、やっとミンホの弁護人になることを承諾している。

そこで大きなポイントになるのが、弁護士の“守秘義務”。これは、弁護士が職務上依頼者から知り得た情報については他に漏らしてはならない義務があるというものだが、他方でこれは警察権力から「しゃべれ！」と要求されても拒否することができる大切な弁護士の武器(権利)だ。

本作は殺人容疑者のミンホと弁護人(候補)のヤンの事情聴取を巡る舞台劇のようなスタイルで、二転、三転、四転、五転、六転、七転していくストーリーを描いていくが、そのキーワードになるのが“弁護士の守秘義務”なので、それをしっかり学習してもらいたい。

## ■□■定番(?)の、車と死体の引き揚げシーンに注目！■□■

ルネ・クレマン監督がアラン・ドロンを主役に起用した『太陽がいっぱい』(60年)は大ヒット。あのハンサムな顔立ちで、お世話になった富豪の親友を裏切るとは！そんな意外感いっぱいのストーリーが、美しい女性と海そしてヨットの風景の中で展開され、最後には死体の詰められた袋が海の中から地上に露呈してくると・・・。

海の中に突っ込んだ車が死体と共に引き揚げられるシーンでエンディングを迎える物語は、松本清張の名作にも登場していたが、本作のラストにも、別荘近くの湖の中からトラックに死体が入った車が引き揚げられるシーンが登場するので、それに注目！

本作のパンフレットには、小林真里氏（映画評論家／映画監督）の『告白、あるいは完全な弁護』完全ネタバレ解析！』があり、ここでは①ヤン・シネ弁護士の正体、②運命の分かれ道（右折）、③キム・セヒ殺人事件の真相、④ハン・ソンジェの死の真相、⑤エンディング、に分けて、本作のエッセンス（＝ネタバレ）が解析されている。事前にこれを読んでしまうと本作の面白味は半減してしまうが、逆に鑑賞後にこれを読めば、ややこしすぎて理解不十分だった点や理解不能だった点の理解ができるはずだ。本作は途中で観る“騙しのテクニック”が拔群なら、エンディングのカッコ良さも際立っているので、「ちょっと無理あり！」の演出があることは否定できないが、やっぱりこりゃ面白い。

## ■□■『ワイルドシングス』を彷彿！騙されて本望！■□■

私が『SHOW-HEY シネマルームⅠ』をはじめて出版したのは、21年前の2002年6月。その、「1）ワクワク・ドキドキ・ラブラブ、これが映画の醍醐味です。」の2番目に取り上げた映画が『ワイルドシングス』（98年）だった。「あるレイプ事件が変な弁護士の尽力で無罪になったところで、『なんだ、えらい早い結末だな』と思ったら、そこから二転、三転、四転ではなく、五転、六転・・・『ええ！』『ええ！』という連続。そしてラストにタネ明かしの映像が流れてきて、事実の流れを再確認して納得。」と評論した、メチャ面白い映画だった（『シネマ1』3頁）。そんな映画について、ネタバレを含むストーリー解説をしていくのは映画評論家としては厳禁。しかして、二転、三転、四転、五転、六転、七転する本作についても、それは同じだ。

本作のパンフレットを読んでも、ストーリー紹介は、殺人容疑者のミンホとヤン弁護士との事情聴取を解説するだけ。したがって、この評論で私が「実はヤン弁護士は〇〇だった！」というネタバレ解説をすることはできない。

そんな欲求不満のため（？）か、本作についてはさまざまな視点によってさまざまなネタバレ情報を提供しているサイトがたくさんある。殺人容疑者と弁護人、2人だけの舞台劇のような密室劇におけるヤン弁護士は知性と度胸が際立っていたが、ホテル密室殺人事件の真相解明（？）や別件交通事故の真相解明（？）が、羅生門方式によって、次々とスクリーン上に提示される中、死亡した息子の母親（＝ホテルの従業員？）の顔、かたちは・・・？撮影上のテクニックを含めて、羅生門方式を徹底させたストーリー構成とさまざまな“ごまかしテクニック”に見事に騙された観客の1人として私は本作に大きな拍手を送りたい。

2023（令和5）年7月5日記